

<「知るっば!久留米」 令和3年7月15日(木) 12:30~放送分>

全国総本宮 水天宮 ～第3回～ 「水天宮の歴史」

<ゲスト：全国総本宮 水天宮 権宮司 眞木 啓樹さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、「水天宮さん」でおなじみの『全国総本宮 水天宮』をテーマにお送りしています。
ゲストはこの方です!

ゲスト:眞木さん(以下「眞木」)

水天宮の眞木啓樹(ひろき)でございます。よろしくお願いします。

坂本 『全国総本宮 水天宮』の第3回目は、『有馬家と水天宮』をテーマにお話をお伺いします。
久留米を治めていた有馬家と水天宮は、どういった関係があるんだろうかということで、
その関係性について教えてください。

眞木 有馬家は今年入城400年ということで、豊氏(とようじ)公はもちろんですが、
水天宮と縁が深いのは、2代目藩主の有馬忠頼(ただより)公ではないかなと思っております。
ちょうど忠頼公の時代 1650(慶安3)年に、今の水天宮の場所(瀬下町)の土地と社殿を寄進し
ていただいたというのが始まりになります。
その名前が、「尼御前神社」から「水天宮」という名前に変わって、
今の場所に移ってから約370年以上の歴史があるということになります。

坂本 いよいよ有馬家が水天宮を置かれて、そして370年以上も経ったんですね。
そもそも、久留米藩有馬家は、なぜ土地を寄進したんでしょうか?

眞木 元々、水天宮は筑後川のほとりを転々としていたのですが、一番は水害を鎮めるため、
水難にあわないうようにという願いを込めて水天宮が建てられたと思います。
また、その水天宮というのは町の人々から信仰がありましたので、
土地や建物を寄進することで城下の人々の支持を得ようとしたり、
また想いを共有しようしたのではないかなと思われれます。

坂本 今お話があったように、今年、有馬家が久留米に入城して400年になります。
当時から水天宮とのご縁が深かったということがわかりました。

眞木 社殿を寄進していただいた1650年に、この寄進の祝賀として花火を奉納したことが、
現在の筑後川花火大会の起源といわれております。

坂本 これもまた歴史の深い催しだということですね。

また、水天宮は、明治維新の原動力となった「尊王攘夷思想」を全国に広めた眞木和泉守保臣（まきいずみのかみやすおみ）がいたことでも知られています。

幕末の水天宮と久留米藩を巡る状況についてお話いただけますか？

眞木 1840年頃の久留米藩は、尊王攘夷論の「水戸学」という学問の派閥が中心にありました。

眞木和泉守保臣は、32歳の時にこの水戸学を学びに水戸まで行くわけです。

その時に会沢正志斎（あいざわせいしさい）と出会い、その学問が和泉守の思想となるわけです。

22代宮司の和泉守ですが、幕府が国を動かしていることに疑問を持ち、

当時の藩主である有馬頼永（よりとお）公に「尊王」の意見書を提出しました。

そして、幕藩体制の解体や天皇を中心とした国づくりを構想し、

久留米藩を動かそうとしたと言われていました。

坂本 大河ドラマのような世界が繰り広げられていたんですね。

まだ多くの藩が動き出す前の時代ということで、先見性があったのかなと感じます。

西郷隆盛や桂小五郎など幕末の志士たちとも接点があって、

もっと表舞台に出ていたのではないかなとも思うのですが、いかがですか？

眞木 実際、和泉守が亡くなった後に明治維新が起こるわけですが、

その時代に生きていれば、本当に歴史が変わっていたかもしれないなと思っています。

しかし、眞木和泉守を支持していた藩主有馬頼永公が亡くなると、

弟の頼咸（よりしげ）公がその後を継ぎます。

そうすると久留米藩の中核は、幕府を支持するグループが実権を握りました。

眞木和泉守は尊王攘夷派なので、危険人物とみなされ、謹慎を命じられます。

今の筑後市水田に「山梶窩（さんしか）」というところがありまして、

そこで10年にもおよぶ謹慎が始まります。

その中で眞木和泉守は、藩の目を盗んで勤王の志士たちと密会を重ねたと言われていました。

坂本 上が変わると立場も変わって、厳しい状況に置かれてしまったということになりますね。

その中で勤王の志士との繋がりもできて、京に向かったということですね。

眞木和泉守もやっと歴史の表舞台へと動き出すわけですね。

眞木 謹慎（幽閉）から抜け出しまして薩摩へ向かったり、その後、京に向かうわけですが、

眞木和泉守は、寺田屋騒動の際に尊王攘夷派に加担したとして久留米藩に連れ戻され、再び幽閉されるわけです。

このとき、和泉守は処刑されるどころまで話は聞いておりました。

坂本 絶体絶命な展開になっておりますが、眞木和泉守は薩摩の尊王攘夷派と一緒にいながら、

ここでも連れ戻され、失脚してしまうんですね。

歴史は非常に残酷ですが、その後はどのような展開になったのでしょうか？

眞木 寺田屋騒動の後、薩摩が力を付けていくのに対し、長州藩はよく思っていないわけです。その長州、今の下関にあたるのですが、その中山神社というところに祀られている中山忠光(ただみつ)卿という人がいました。その忠光卿が、「眞木和泉守は京都に来るように」という文書を久留米藩に送りました。そして、もし和泉守を処刑するようなことがあれば、我々は兵をなして久留米に攻め入ると言って久留米藩に圧力をかけるわけです。その結果、和泉守は釈放されることになります。いよいよそこから、眞木和泉守は再び京都に上り、桂小五郎や久坂玄瑞など、後の明治維新の中心人物たちと討幕運動に励みました。この時、和泉守はいち早く薩長同盟の重要性を志士たちに説いていたそうです。

坂本 まさに大河ドラマにも出てくるような話ですごいなと思います。そういう人物が久留米から出たというのは、誇りでもありますよね。その後はどうなるのでしょうか？

眞木 その後、和泉守が生涯をとげる大事件というのが、みなさんご存じの「蛤御門(はまぐりごもん)の変」、通称「禁門の変」でございます。1864年の7月19日に起こる蛤御門の変というのは、和泉守や長州藩の尊王攘夷派、つまり、天皇を立てる立場(思想)にある者たちが、京都の御所に押し入るとい事件ですよ。それを守るのが幕府側ということで、すごく混乱しがちなところですが、実は「天皇自らが全ての政(まつりごと)、政治などをすべきですよ」という嘆願書を持って行っている途中の出来事なんです。そして、それを阻止しようとする佐幕派との戦争が起きたのが禁門の変となります。最終的には、和泉守はそこから退き、天王山という山で自害をするわけですが、その自害をしたのは、決して敗戦したからという理由ではなく、御所で血を流した責任を取ったということで、52歳の生涯を終えました。

坂本 幕末の動乱の中で最後まで自分の信念を貫いた方だったんですね。

眞木 この明治維新というのは、眞木和泉守は自分の目で見ることはできなかったのですが、1867年には「大政奉還」という形で、その思いを持った志士たちの願いは実現したわけです。今では水天宮の境内には、眞木神社として和泉守や同じ思想を持った志士たちの御霊を祀った場所がございます。

坂本 眞木さん、今回も興味深いお話をありがとうございました。次回は『水天宮の年間行事』というテーマでお送りします。おたのしみに。